

# 禿安慧

梅林 誠爾

## 仏教天文学

ここ数年仏教天文学について調べている。仏教天文学？  
 そのような天文学があったのかと思われるかもしれない。だが、江戸の終わりから明治の初めにかけて、仏教天文学あるいは梵曆と呼ばれる思想運動が確かに存在した。仏教天文学を創設したのは、普門円通（宝暦五年〜天保五年「一七五五〜一八三四」）という坊様だ。江戸時代も後期になると、西洋近代天文学（地球説、地動説）は次第に広まり、また外国船の到来などを通して、多くの日本人も自分たちが生活する大地が平らではなく球であるということを実感するようになってくる。伊能忠敬らの実測（一八〇〇〜一八一六年）による日本地図のように、西洋天文学を踏まえた学術的な成果も生み出される。そうした折、円通は、大著『佛國曆象編』（文化七年「一八一〇」）を書き、西洋近代天文学に対抗して、須弥界という仏教の信仰世界の説を擁護し、それに基づく曆理を打ち立てよう

とした。

須弥界説は、地も天も

平であり、地は動かず日

月衆星が動くという東洋

の伝統的天文地理説の一

つである。それにれば、

一世界の中心には須弥山

が卓立し、それを七海七

金山が囲み、その外の大

海に東洲、西洲、北洲、

そしてわれわれが住む南

洲（閻浮提洲）の四大洲

が浮かぶ。また、日が須

弥山を中心とする円を描

いて四洲の上を地に並行に周回し、日の周回とその軌道の

変化が昼夜や季節の変化をもたらすという【写真参照】。

しかし、天文観測は、むしろ西洋の地球説・天球説を支持する。例えば、異なる二地点で北極星を観測すると、北

極星の仰角の差は二地点の緯度の差に対応する。この対応

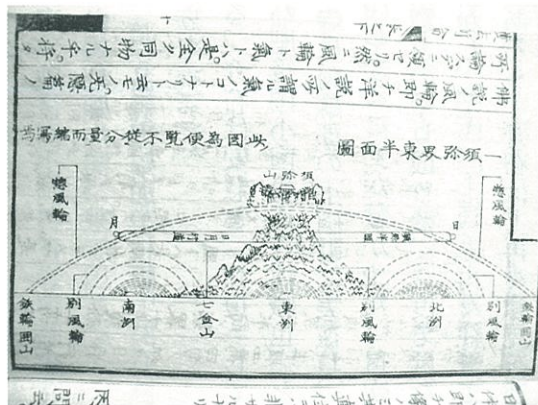
は地が球であることを暗示する。また、日々の体験では、

太陽や月の軌道は、地に平行ではなく、天頂で高く地に出

没する円弧を描くように見える。

仏教天文学者も、観測事実による限り自分たちが不利で

「一須弥界東半面圖」  
安慧『護法新論』巻之下十丁



あることを認めている。しかし、彼らは、あくまで仏典に記された平天平地の須弥界が実在世界であると譲らない。その実在の須弥世界が西洋説の地球、天球の姿に見えるに過ぎないのだと主張する。そして、そのように見える理由を説明するという困難な問題を引き受け、種々仮説を設けて問題を解くことで仏説を擁護しようとした。円通は、「展縮」の理という仮説を立てる。実在の須弥界が「縮」して西洋説の地球天球の姿となり、地球天球を「展」すれば須弥界になると言う。熊本は八代郡出身の仏教天文学者佐田介石は、「視實兩象ノ理」という仮説を立て、実象である須弥界と視象である地球天球とをわれわれの「見なし」によって繋ぐ。同じく熊本は阿蘇小国の天文学者禿安慧は、「円準之理」という仮説を立て、日月や北極星を観測するわれわれの視線が大气によって屈折させられるために、平天平地の須弥界が地球天球の姿に見えるのだと言う。このように、仏教天文学者たちは、西洋天文学に対抗してあくまで須弥世界を実在世界としつつ、しかし何とか西洋天文学（中でも地球説）との繋がりを付け、自説に説得力を持たせようとしたのである。

佐田介石『天地論往復集』

「禿安慧」という不思議な名前に私が出会ったのは、あ

る論文の注の中に「禿安慧『護法新論』」という語句を見つけたのが最初であった。早速『護法新論』（慶応三年刊、三卷三冊）同『二編』（慶応四年自序、明治二年刊、三卷三冊）を古本屋から購入した。しかし、その著者は、「禿安慧」ではなく「勝因道人」となっていた。しばらくして、佐田介石の『天地論往復集』（明治十四年「二八八一」）の中に、「安恵」の名があることに気付いた。『往復集』は、介石と日本人論者たちとの「天地論往復」すなわち天文地理についての（論争的な）やり取りを集めて出した刊本である。その目次の九から十二に、次が並んでいる。

九 安恵初往復 安恵ハ肥後国小国善正寺住職也

十 同 再往復 一名幾理婦加美

十一 同 再々往復無復 一名幾理婦加美枝折

十二 同 護法新論弁妄

まず、「九」が目に残る。介石は安慧と「往復」していたのだ。しかも、「安恵ハ肥後国小国善正寺住職也」とある。調べてみると、善正寺は阿蘇郡の小国町に実在し、そのご住職は「禿」とおっしゃることが分かった。目次「十」によれば、介石と安慧とのやり取りは、一度ではなく数度なされたようだ。しかし、「十一」は、「再々往きて復ること無し」と読むのであろう。介石は、再々意見を述べたが安慧からの返答が無いことに苛立っている。また、「幾理婦加美枝折」とは、「霧が深く見通しがきかない暗



い中で、木の枝を折って帰りの道しるべとする」といった意味で、霧の深みに囚われている安慧に対して返答を促しているのかもしれない。あるいは、「霧」は、安慧の言う視線を屈折させる気（大気）を指している可能性が高い。そうすると、その霧の深み（気による視線の屈折論）を脱して帰って来るようにということかもしれない。そして、「十二」は、安慧の『護法新論』の誤りを弁じるとなっている。安慧との往復は、極めて論争的である。

ところが、『天地論往復集』には、目次九〜十二に対応する本文がない。『往復集』から、二人の論争的なやりとりの具体的な内容を取り出すことはできないのである。それでも、明治初年禿安慧が阿蘇郡小国町宮原の善正寺に住していたこと、既に慶応三年に「勝因道人」の号で『護法新論』を著していたことなどが分かる。そして、『護法新論』の基本的な主張「円準之理」すなわち気（大気）による視線の屈折論をめぐって、広く言えば、実在の須弥世界と西洋の地球・天球説とをいかに繋ぐかという仏教天文学の中心問題をめぐって、佐田介石と禿安慧が論争的なやり取りを交わしたというように推測することが許されそうである。

### 禿迷盧著『小国郷史』

まずは、善正寺を訪ねなければならぬ。その前に、善

正寺について調べておこうと思ひ、小国地方の郷土史資料を本学図書館で探してみた。すると、禿迷盧著『小国郷史』（昭和三五年）、『続小国郷史』（昭和四〇年）を見つけたことができた。著者略歴には、「明治二十五年：宮原善正寺にて、禿卓英ミサオの三男として生る」とあった。また、迷盧氏は、『続小国郷史』の中で「祖父安慧」と言っている。間違ひなく安慧ゆかりの方である。『小国郷史』には、善正寺について次のように記されている。

### 法城山善正寺（真宗本派）

開祖は筑後浮羽郡の一部と豊後日田郡の内中津江村を領有した武士池部氏、故あって小国に来て出家して、第一世西順と称し、寛永五年（一六二八）寺号木仏免許を受け本堂を草創した。文政三年（一八二〇）再建し、嘉永五年（一八五二）本堂類焼し、明治十七年改築。禿安慧は本願寺より司教を授叙され、仏教天文学を研究し『護法新論』二冊、「神代道分」「天文三字経」等の著書がある。禿卓英は補教を授けらる。（五八七頁）

### 善正寺を初めて訪ねる

阿蘇郡小国町に初めて善正寺を訪ねたのは二年前、平成二〇年の一月であった。善正寺は、小国町宮原の旧町役



場近くに、立派な鐘  
楼門を構えて建つて  
いた【写真参照】。

門前を小川が流れ、  
すっかりした石橋  
が架かっている。

石橋の親柱には「通  
浄橋」の名と「大

正十一年六月」と架橋の年月が彫つてある。辺りを見渡すと、善正寺一帯は、東、西、南の三方を小高い山や丘に囲まれている。恐らく西の丘のことであろう、安慧は、「俗二九郎丘トイフ」と『護法新論』に記している。視線や光線に関心を寄せていた安慧は、春秋二分の頃「納日」が九郎丘の樹の梢にかかつて、梢の茫洋とした影が寺の西側の障子窓に映ると書いている。

鐘楼門をくぐり、寺務所を訪ね、ご住職の禿浩道師にお会いすることができた。ご住職は、お忙しい時間を割いて、禿安慧と善正寺について話して下さった。まず、「安慧」は「あんね」とお読みするということや生没年（文政二年～明治三四年「一八一九～一九〇一」）などの最も基本的なことを、井上哲雄著『真宗本派学僧逸伝』（永田文昌堂、昭和五四年「一九七九」）にも触れながら、教えていただいた。また、明治五年に、僧も苗字を名乗るように

との新政府の指示が出された折、安慧は、本願寺「大谷」にちなんだ「花谷」という姓も考えたが、親鸞の故事に依り「禿」という姓を付けたということをも、『小国郷史』（三四頁）を開きながら教えてくださった。安慧の著作の中で、「禿安慧」あるいは「花谷安慧」「花谷道人」などの名が記されているものは、明治五年以降の著述ということになる。

実際、「花谷安慧著」と記された『天文三字經』（国立国会図書館・近代デジタルライブラリーに公開）は、明治七年の出版であり、「禿安慧著述」の『天文健徑古之中道』（国立天文台図書室所蔵）には、明治一三年の「花谷道人」による自序が付けられている。逆に、慶応三年の名著『護法新論』は、「勝鬘道人著」となっていて、「禿安慧」や「花谷安慧」などの名がないことにも納得がいく。しかし、「菴陰 沙門 安恵述」とだけ記された『日本鈍質問』という写本があつて、この写本には執筆年が書かれていない。

安慧の著述であることは明らかだが、執筆年の判断が難しい。この写本の表題は、介石が文久二年に著した『日本鈍』（別名『鈍地球説略』）に対する「質問」を意味する。内容をみると「質問」というより、厳しく「問い質す」「批判する」ということである。安慧と介石との論争を知る上で、『日本鈍質問』は重要な写本であるが、その執筆年の判断が難しいのである。



主著『護法新論』

安慧の主著『護法新論』は、三巻三冊から成る。その巻之上は、「無隠篇」と題されている。自説を隠さず明らかにするという意味であろう。安慧は、円通の仏教天文学を踏まえつつ、しかし円通後の仏教天文学、とりわけ佐田介石の説を批判しながら、「円準之理」、すなわち視線が地球によつて屈折させられるために、平天平地の須弥界が地球天球の姿に見えるのだという仮説を提案している。その際、安慧は、西洋近代科学の大気論と屈折光学とを積極的に活用する。次に、巻之中は、「平邪篇」と題されていて、西洋の地球説・地動説の批判である。中国在住の米国人牧師 R・Q・ウェイ（中国名：裨理哲）が、西洋近代の天文地理学を中国語で紹介した『地球説略』（一八五六）が、批判の対象となっている。「護城篇」と題されている巻之下は、西説からの仏説への批判に対する反駁である。なお、明治二年出版の『護法新論二編』は、やはり三巻三冊から成るが、巻之上、巻之中は「護城篇」、巻之下は「平邪篇」である。

『護法新論』同『二編』を開くと、安慧が古今東西の数多くの文献を広く踏まえていることに驚かされる。師と仰ぐ円通からは、主著『佛國曆象編』文化七年（一八一〇）を初め、『須弥山儀銘並序和解』文化十年（一八一三）、『縮

象儀説』文化十一年（一八一四）、『梵曆策進』（著述年不明）、『實驗須彌界説』（一八二二）などを、自説の根拠として引いている。また、安慧が参照している仏典は、『佛説立世阿毘曇論』『日月行品』を初め、『起世經』『阿毘達磨俱舍論』『摩登伽經』『正法念經』『大樓炭經』など、挙げていくと限がない。漢籍も、『論語』や『孟子』はもちろんで、『周髀算經』（紀元前2世紀）『史記』『天官書』（紀元前一世紀）、『新唐書』『天文志』（十一世紀）、『管窺輯要』（十七世紀）などの天文曆算書を引用、参照している。さらに、『日本書紀』北畠親房の『神皇正統紀』（一三三九）、本居宣長の『眞曆考』（天明二年「一七八二」跋）、服部中庸の『三大考』（寛政三年「二七九一」）などの国学の文献にも、度々批判的に言及している。

ところで、安慧仏教天文学の特徴は、安慧自身の仮説「円準之理」のためにも、西洋天文説を批判するためにも、西洋近代科学の理解に努め、それを活用するという点にある。安慧は、西洋科学を解説した日中の漢語文献に広く当り、時にはそれを自説の根拠あるいは西説批判の根拠として利用し、また時には批判の対象としている。湯若望 (Adam Schall von Bell) 編『西洋新法曆書』（一六四五）、游子六著『天経或問』（西川正休訓点本、享保十五年「一七三〇」）、梅文鼎撰『曆学疑問』（訓点本文政三年「一八二〇」）、青地林宗訳述『氣海觀瀾』（文政一〇年

〔一八二七〕、合信(B. Hobson)著『博物新編』(一八五五)、  
裨理哲(R. Q. May)著『地球説略』(一八五六)、上海墨  
海書館発行『六合叢談』(一八五七~五八)、侯失勒(John F.  
W. Herschel)著『談天』(一八五九)などをたびたび引用  
し参照している。この文献の多さからも、安慧の几帳面な  
学風、姿勢が伝わってくる。

### 教育者、禿安慧

安慧は、教育者でもある。『真宗本派学僧逸伝』によれ  
ば、安慧は明治二年の安居に、本願寺で「日月行品」を副  
講している。著作の一つ、『天文三字經』は、仏教天文学  
の入門テキストである。安慧の名は、仏教天文学の学僧と  
しても、教育者としても、維新前後の仏教界に知られてい  
たようである。ご住職のお話では、小国郷内はもちろん、

安慧肖像写真(善正寺『八世住職百  
回会慶讃法要』より)



大分県や鹿児島県、佐賀  
県、また山口県や広島県  
からも、宗学や佛教天  
文学を学ぶために、青  
年僧たちが安慧を訪ね  
たという。安慧は、境内  
に寮を建て、塾を開き青  
年僧たちを門弟として

迎えた。『続小国郷史』には門弟たちの名が紹介されてい  
る。そのお一人、山口県厚狭郡(現、山陽小野田市)正教  
寺の姫路爲雄と言われる方は、十三歳の時、仏教天文学の  
本を開いていたら、お客僧から、関心があるのであれば、  
九州肥後に安慧という師がおられるので、弟子入りすると  
いいだろうと紹介され、安慧の門弟となり、安慧入寂まで  
の十三年間、教えを受けたという。後に熊本市の東水前寺  
の浄覚寺をお訪ねした折り、ご住職の姫路賢彰師から、そ  
のような言い伝えを聞かせていただいた。

しかし、善正寺は、たびたび火難に遭った。嘉永五年に  
本堂が類焼し、明治十七年に安慧によって再建されたが、  
昭和二五年にも火災に遭っている。安慧が門弟たちを教え  
た学寮は、鐘樓門を入れて左手に建てていたそうだが、今  
は残っていない。安慧が『護法新論』の中で引いている洋  
の東西の多くの書籍が、善正寺に所蔵されていたのではな  
いだろうか。青年僧たちもそれを手にしたのではないか。  
安慧は、『日本鈍質問』で、「今也昇平日久ク、余暇ヲ得ル  
者、書ヲ窓前ニ開カサルマシ。苟クモ書ヲ開クモノハ彼ノ  
二球ノ説ヲ閱スルヲ以テ先トス」と書いている。『日本鈍  
質問』の執筆年は定かでない。戊辰戦争を念頭に「今也昇  
平日久ク」と言っているのかもしれない。だが、安慧が『日  
本鈍質問』を「丁丑ノ秋」(明治十年秋)に介石に贈った  
と、介石は写本『闇中案』に述べている。やはり西南戦争



終結と関連しているように思われる。安慧は、西南戦争終結の頃、「今や平和な日が長く続く」、読書に専念し、西洋の天地二球説を学ぶようにと、若い門弟たちに語りかけているようだ。とすれば、『護法新論』に引かれた西洋天文地理学に関する書籍が、安慧の学寮にあったのではなからうか。また、禿迷盧氏は、『続小国郷史』で、「祖父安慧は老年だったが屋根に上って望遠鏡を手にして星の観測をしていた。星座図の掛軸もたくさんあった」（五〇一頁）と述べている。天文観測器具、星座図、幾多の蔵書、そして安慧自身の著作の多くが、火災により失われてしまったのであろう。

損失を嘆いていると、ご住職は、熊本の京塚に浄覚寺がある、安慧ゆかりの寺であるので、何か伝えられているかもしれない、訪ねてみてはどうかと教えてくださった。

### 浄覚寺を訪ねる

浄覚寺をお訪ねしようと思いつきながらも、『護法新論』『二編』を読み終えてからだと考え、ここ二年ばかりお訪ねすることができなかつた。それでも先月の十月末、決心して手紙を差し上げたところ、浄覚寺のご住職の姫路賢彰師から、いつでもよいという有り難いお返事をいただいた。浄覚寺は、熊本県立大学の近く、京塚のバス停から二三分

のところにある。立派な鐘樓門が印象的である【写真参照】。ご住職と坊守様は、「祖父爲雄が書き残したもの」だと、浄覚寺爲雄師が残された覚書を示しつつ、安慧師や浄覚寺についてお教え下さった。覚書を書かれた姫路爲雄師は、少年の頃山口県厚狭郡から善正寺の安慧の下に入門された方である。爲雄師は、覚書に「安慧ノ孫(娘)」と記された方と結婚され、浄覚寺に住された。浄覚寺は、熊本城下の古川町に在ったが、西南戦争の後九品寺に移り、昭和二八年の白川大水害の後、東水前寺の現在地に移築再建されたという。爲雄師が住されていた頃、浄覚寺は九品寺にあったのであろう。現在の本堂の梁や柱は、九品寺の時のものを使っているとのことであつた。



ご住職によれば、覚書に「安慧ノ孫」とある方、つまり爲雄師の奥様と、『小国郷史』の著者禿迷盧氏とは姉弟で、迷盧氏はたびたび浄覚寺に姉上を訪ねられたという。浄覚寺鐘樓門の寺号は、迷盧氏の筆によるとのことである。迷盧氏は、ご自身について「善正寺にて、卓英、ミサヲの三

男として生まれる」と記されている。ミサヲ様が安慧のお子であると、ご住職姫路様から教えていただいた。

爲雄師覚書には、善正寺の由来も書かれている。善正寺開基は西順、安慧は第九代とある。禿迷盧氏も、『小国郷史』の執筆に際してこの覚書を史料の一つとされたのであるとのことであった。ただ、浄覚寺ご住職は、安慧は第八代とも聞いていると言われた。

### 善正寺を再び訪ねる

二年前に善正寺を初めてお訪ねし、今また浄覚寺をお訪ねし、色々とお教えいただいたが、禿安慧についてよく理解できたという気持ちに、なかなかない。安慧のご母堂や奥様のことがまだ分からない。そもそも安慧師がお眠りになっている墓碑を訪ねていない。また、善正寺において、十年ほど前、安慧入寂百年の法要が営まれたとお聞きしたが、その折の様子も知りたい。

十一月の初め、木々が紅や黄に色づいた阿蘇外輪山の間路を小国宮原の善正寺へと向かった。ご住職禿浩道師、坊守様は、安慧ゆかりの様々な品を見せてくださった。

二〇〇〇年一二月に、安慧百回会法要が「八世住職百回会本堂屋根瓦葺落成慶讃法要」として善正寺において営まれている。その折、発行された記念冊子を開くと、安慧師の

お写真が見えた【前掲載写真】。初めて拝見する端正なお顔には、優しさとともに厳しさが感じられる。冊子には、安慧が嘉永三年（一八五〇）に京都で、仏者の信心を説きながら詠んだ漢詩も載っている。読み下しとともに引いておこう。

信心定処往生定

此事有微君莫疑

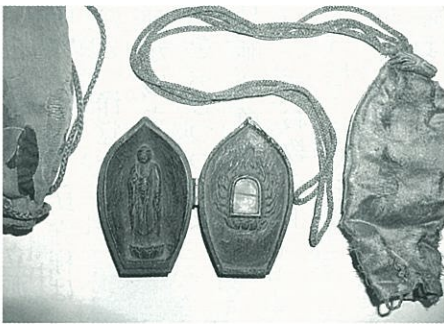
一樹寒梅春未到

香風蚤已在南枝

信心定まる処、往生定まる。此の事微有り、君疑うなかれ。一樹の寒梅、春未だ到らずとも、香風蚤はやすで已在南枝にあり。

ご住職と坊守様から、善正寺に伝わる安慧ゆかりの品々を、拝見させていただいた。それらは、私のようなものが

目にすることはなかなか許されそうもない品々である。その一つは、安慧が日々参拝していた厨子と、旅や修行において離さず身に着けていた仏舍利容器である。仏舍利容器は、古くなつた布に幾重にも包まれ、紐が付いた絹の布袋に入っていた【写真参照】。私は、もちろん仏舍利容器を見るのは初めてで、い

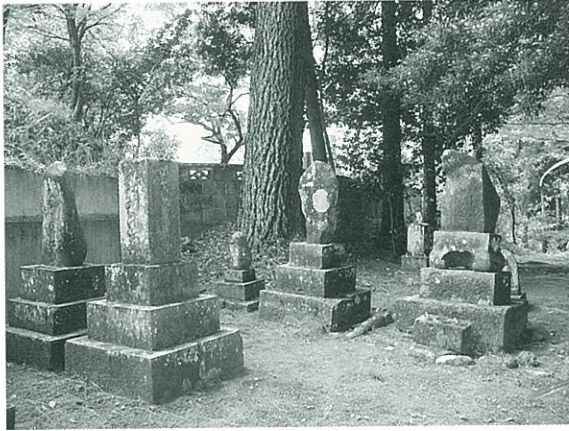




くらかでも安慧に近づくことが許されたことを喜びながら、ご住職のご親切に感謝しつつ拝見させていただいた。坊守様は、経函を一つ運んで来られた。中には、安慧が明治一二年に購入した大蔵経（『大日本校訂大蔵経』）が納めてあった。この大蔵経は、昭和二五年の火難を免れ、全巻無事に今日に伝えられているとのことである。

その他にもゆかりの品々をお見せいただき、また安慧百回会法要の冊子に付けられた年表を拝見することで、学僧安慧の人となりについていくらかの確信を得ることができた。善正寺を失礼する前に、ご住職に、安慧の墓所まで案内していただいた。安

慧が『護法新論』のなかで触れている「九郎丘」であろうか、善正寺の西側の小高い丘の松や杉の木立の中に、安慧は、奥様のタネと仲良く並んで眠っておられる（右から八世安慧、その隣が奥様）。また、周りには、安慧以降の歴代住職と坊守の方々の墓石も並んで



いる（左端が九世卓英、その隣がミサヲ様）。安慧の自然石の墓塔には、太い字で「八世安慧」と彫られている。側面には、仏教天文学に関わる安慧の事績が刻まれている。

#### 安慧略歴

最後に、安慧百回会法要の冊子に付けられた年表を参照して、安慧の略歴をまとめておこう。

文政二年「二八九」

六月六日、善正寺第七世住職浄空と母エツの子として誕生。

文政一〇年「二八二七」

父を亡くす（数え九歳、以下同じ）。善正寺第八世住職となる（十六歳）。

天保五年「二八三四」

タネ誕生。

天保一二年「二八四二」

京都で漢詩詩作（三十二歳）。善正寺本堂類焼（三十四歳）。

嘉永五年「二八五二」

宇土郡中村の寺尾慶五郎の二女タ

ネと結婚。

文久二年「二八六二」

娘ミサヲ誕生（四四歳）。

慶応三年「二八六七」

『護法新論』（三巻三冊）刊行。「神代道分」著す（四九歳）。

明治二年「二八六九」

『護法新論二編』（三巻三冊）刊行。安居に「日月行品」を副講（五一歳）。

明治五年〔一八七二〕 「禿」を姓とする（五四歳）。

明治七年〔一八七四〕 『天文三字經』刊行（五六歳）。

明治一〇年〔一八七七〕 『日本鎚質問』を執筆し、佐田介石に贈る。介石との論争（五九歳）。

明治一二年〔一八七九〕 『大日本校訂大藏經』購入（六一歳）。

明治一四年〔一八八二〕 『天文健徑古之中道』（明治十三年自序）刊行（六三歳）。

明治一七年〔一八八四〕 本堂再建（六六歳）。

明治二一年〔一八八八〕 この頃姫路為雄安慧に入門（七〇歳）。

明治二五年〔一八九二〕 迷盧氏、禿卓英ミサヲの三男として生まれる（七四歳）。

明治三四年〔一九〇二〕 一二月九日入寂、八三歳。同日司教を贈られる。

### 謝辞

この調査に於いては、小国町宮原善正寺ご住職、禿浩道様、坊守様、また熊本市東水前寺浄覚寺ご住職姫路賢彰様、坊守様から、幾多のご教示とご援助をいただいた。また、熊本県立大学の米谷隆史准教授から、禿安慧著『日本鎚質問』のコピーをいただくことができた。皆さまに厚く御礼申し上げます。

なお、小論の題の「蘓陰」は、『日本鎚質問』冒頭の「蘓陰 沙門 安惠述」から取った。「阿蘇」の「蘇」は、時に「魚」と「禾」とを左右入れ替えて書くことがあるようだ。阿蘇高校セミナーハウスに掛けられた大きな額にも、「阿蘓」と彫られていた。